

主 文

被告人Aに対する原判決を破棄する。
同被告人を罰金五千円に処する。

右罰金を完納しないときは金二百五十円を一日に換算した期間労役場に留置する。

原审訴訟費用中証人Bに昭和二十六年四月十四日の出頭に支給した分、証人C、同B1、同B2に各同年五月十五日の出頭に支給した分、証人B3に同年五月二十二日同年七月二十一日の出頭に支給した分、証人Dに同年六月十九日の出頭に支給した分、証人B4に同年七月二十一日の出頭に支給した分、証人E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、O、P、Q、R、S、T、U、V、W、Xに各支給した分は、いずれも被告人Aをして被告人A1並にA2と連帯して負担せしめる。

被告人Aに対する本件公訴事実中脅迫の点は無罪。
被告人A1、同A2の控訴はいずれもこれを棄却する。

理 由

被告人三名の弁護士渡部信男の論旨は同弁護士提出の控訴趣意書に記載する通りであるからこれを引用する。

一、傷害の点の無罪を主張する論旨について。
しかし原判決拳示の証拠を綜合すれば、原判示日時被告人A方に行われたY会の新年宴会の席上、参会者のB5を迎え取りに来た其の兄B3が、先に右Y会から除名中の者であつたところから、些細な口論が発端となり、右B6兄弟と被告人ら多数派の会員との間に、原判示争闘が展開せられるに至つたものであり、その争闘が何れの側の攻撃から開始せられたものであつたにせよ、被告人らは他の会員の味方と意思相通じ相手側と互に攻撃及防禦の方法を応酬してB3に対し原判示暴行による判示傷害を加えた事実を認定するに足るから、被告人らの右所為は弁護人所論の如く正当防衛をもつて目すべき余地のないものと云わなければならない。所論は採用することが出来ない。

二、被告人Aに対する脅迫罪認定の事実誤認を主張する論旨について。
原判決はその事実理由第二として被告人Aは右口論争闘の際B5が十能を以て前記同所内炭火を数回すくい上げて同家「オエ」の間に撒き散らし同所に敷いてあつた莫産及び藁藁数枚の各一部を焼損し又右B3が同間にあつた被告人A管理にかかる一升瓶などを損壊し被告人A1に対し左肘等に傷害を加ふるなどの乱暴をならし他の者に取り押えられてその後退士したことを痛く憤激しZダム問題で予てから意見を異にする同会会員B2、同B1、同B7及び同会会員で且つZ1中学校Z2教場勤務の教員Bを同会から強いて退会処分にしようとした旨を同日午後十一時頃同所内B3、B5の前記犯行に荷担したこともなく又荷担したと疑われるようなこともないのに同会会計係B4をして前掲同会の集会決議録中「昭和二十六年、一月一日決議、兼て除名中のB3の件、本日新年会を催し中に不法侵入して器物破損し又火沙汰まで起した、此に行動を友にしたB5を前記B3と共同行位であると同所内B5を本会より退会を命じたる事決議す」と記載してある次に「前記二名の行動に事前からもつて協力した者と見なし総意により本会より退会を命ず、右氏名、前金長B、前会計B7、B2、B1右決議す」と記載させた上即時、同所において右B2、B1、B7の面前にて自らこれを読上げ右三名及びBはB3、B5等と共謀し計画的に前記のような炭火撒布、器物損壊等の犯行に及んだものとして右四名に対し同会より退会を命ずることを提議し同席上の同会会員十数名と共に該四名の意思に又してこれを決議し右B2、B1、B7に通告し、次いで同所に呼び寄せた前記同会会員Bに対し他の同席者をして前同様通告させた上自己も亦これを告知し以てそれぞれ同所内B3等の名誉を毀損すべきことを以て脅迫した旨判示したものである。

〈要旨〉よつて原审の取調べた諸証拠に当審の直接認識した諸般の資料を綜合して考察すると、Y会は〈要旨〉aに臨む山間僻地の山村b村字c部落の男子青年層の間に数十年以前から組織せられて来た団体で、その目的は会則によれば、一、敬神崇仏をもつて精神の修養を為し、一、種々の事業を図り基本金及び財産を蓄積し基礎を鞏固にして益々発展を期し、一、学問技芸を奨励し知識を練磨することなどをもつて部落の発展に寄与することにあるとし事実上部落に成人し又は居住する一定年限の青年の全部が原則上入会することが慣習とせられており、右慣習に従い入会することを肯ぜず又は入会の申出を拒まれた事例は古来皆無に等しい事実であるけれども、他面会則によれば会の名誉を汚辱し又は秩序を乱すなどの非行のある者その

つつか部をの慣又環な除かち撃的
「曾民は」交な名るら被かも打の躍
「落者況絶う除蒙なにはは苦い飛
ては部た状がよ「をばく現と痛なる
いはけう民のの撃れ如このが計
おに受云落そ半打けのみい上料し
いにし分るし又は後苦な半のし神資推
頭名処れ対り右ぬ認示う受けす
冒除のかに執ららと判めう存けす
のを会置者をかか法右認めを受認現
由者退に名置る少飾もを証視をつ
理たは境除措あ上修て例す冷内容も
実め又環被るで神の見前示「内を
事認めるてかか精個てのをるの理
のと除蒙於か明一つ去とな実推
そいらをににはれ、さ過こ何事の
てなく撃去現にさいあいる如例
しく会打過でこ視用を古すの体事
とし同苦はみない冷に料た在他具た
察わ、痛半のな冷にめ資つ存のてし
考さりぬ前すでか為の執の其の在な
するふあら中示の民す般を行らつ存
すにもかのをも落表諸慣かにつ存
関員と少定とた部をた処な民か去
に会こ上認こしはれ、のう落る過
点同た神右る示者況わ交のう部は
のはじ精もあ判た状況絶のにさ
右又講、どがをけうにがそ現だ判
は者をれれ例と受云件民はが立右
決た置さけ事こをと本落又者にの
判つ措視るたる分るし部り名「審
原ある冷いつす処れかし執除境
にのすらて執在のかし対を被環ら
然行交かしを存会置に、に置、る
てら落認措行は境に、に置、る

以上説示の理由により結局被除名者に対する公私の交際の絶止その他の生活利益の侵害を何らかの形で企図し又は認識したことに就いて証拠の十分でないことに帰着する本件処分により脅迫罪の成立する証明はないものと云うべく、されば被告人Aに対しても本件脅迫罪訴因につき無罪を言い渡すべきであるのに有罪を認定した原判決は違法であり破棄を免れない。

本件諸般の犯情を酌量しても同被告人らに対する原審罰金五千円の量定は必ずし
過重とは認められない。所論は採用出来ない。

五、 被告人Aの控訴は前記二の点で理由があるので刑事訴訟法第三百九十七条第四百条但書を適用して同被告人に対する原判決を破棄し当裁判所において被告事件につき次の通り審理判決する。

を条に
法律三
定場
法第
量役
に条
を勞
実二
刑を
事第
の文
告人
た主
置被
め置
認措
で同
て時
内
い臨
困
つ等
範
に金
のを
因罰
額合
訴条
金割
の十
罰の
罪六
定文
害第
所主
傷条
てり
の四
しよ
の百
四に
第一
百二
選八
第條
示金
刑十
判法
第十
二第
は罰
刑法
に中
刑
為所
刑
証の
定合
の場
示告
の納
拳被
か
とる
完
決す
不當
判該
原用
適に

留置し、原審訴訟費用中主文記載の分は刑事訴訟法第百八十一条第百八十二条により同被告人と他の両名の被告人との連帯負担とする。

本件公訴事実中被告人Aに対する原判決掲記の脅迫罪に関する訴因は本訴因についてもその予備的訴因についても前記共通の理由によつて犯罪の証明がないので刑事訴訟法第三百三十六条により無罪の言渡をなすべきである。

そこで主文の通り判決する。

(裁判長判事 吉村国作 判事 小山市次 判事 沢田哲夫)